

男子学生の勤労観 続報

帝京大医学 ○ 塩原 登子

和洋女大文家政 酒井ノブ子

目的 女子学生、その他の勤労観については、酒井らがすでに家政学雑誌等で発表しているが、家族の構成員であり、やがては家庭経営の主体のひとりともなる男子学生の勤労観調査が欠落していたので、家庭経営の基礎資料とするため、男子学生の勤労観について調査を行った。女子学生との違いや、年齢別、学部別の違いについては、現在家政学雑誌に投稿中である。従って、本報はその続報として、勤労意欲別、仕事の選択基準別に男子学生の勤労観の違いはみられないかを明らかにしようとするものである。

方法 調査時期は、昭和55年10月～11月である。対象は、帝京大学の男子学生5747人中、500人をランダムに選んで、復問紙を配布し、498人の解答をえた。

結果 勤労意欲別では、「人なみの働きでよい」とするもの(34/人)と、「人なみ以上に働きたい」とするもの(86人)にわけ、みることにした。仕事の選択基準別では、仕事を選ぶとしたら「収入の多い仕事を選ぶ」とするもの(56人)と、「世間の評判の高い仕事を選ぶ」とするもの(55人)とにわけ、みることにした。勤労意欲のたかい者にくらべ、よりひくい者は、のんびり暮らしたいとし、趣味などに生きがいを感じ、遊んで暮せればと願っており、仕事に対する姿勢が消極的であるという傾向がみられた。世間の評判の高い仕事を選ぶ者は、収入の多い仕事を選ぶ者にくらべ、くらしむきにゆとりを感じている者が多く、若しくはもつカレマ申こうとし、仕事をする意味は、個人の能力を発揮するためのものと考之ている者がより多い傾向がみられた。